

多文化共生に向けて ～愛知県各自治体の取り組み～



名古屋学院大学
国際文化学部国際協力学科

名古屋学院大学
国際文化学部国際協力学科
発展セミナー（佐伯担当）報告書

多文化共生に向けて ～愛知県各自治体の取り組み～

2016 年 3 月

目次

愛知県 愛知県国際交流協会	阿波根夕暉、小谷直樹、田中将平、崔月、野津真琴、李珊娜……	4
名古屋市 名古屋国際センター 名古屋朝鮮初級学校 子ども日本語教室 九番団地子どもサッカー教室	神納和希、立島誠人、服部菜穂、藤井諒、葉政廷…… 阿波根夕暉、崔月、野津真琴、李珊娜…… 小谷直樹、立島誠人、葉政廷…… 神納和希、田中将平、服部菜穂、藤井諒……	5 6 8 9
安城市 安城市国際交流協会 サルビアにほんごの会	丸下友理恵、渡辺菜月…… 丸下友理恵、渡辺菜月……	10 11
一宮市 一宮市国際交流協会 日本語ひろばジュニア	五十君有紀、馬淵桃香…… 東祐斗、深川開斗……	12 13
岡崎市 岡崎市国際交流協会 日本語サロン	足立七瀬、大場麻由…… 足立七瀬、大場麻由……	14 15
蟹江町 かにえ国際交流友の会 日本語しゃべろう会	渋江万里亜…… 渋江万里亜……	17 17
豊川市 豊川市国際交流協会	大須賀夢……	18
豊橋市 カンティニーニョ学園	溝口真由……	19
結びにかえて	佐伯奈津子……	21

愛知県国際交流協会

公益財団法人・愛知県国際交流協会は、諸外国との友好親善、相互理解を目指し、愛知県の国際化、県民参加の国際交流の推進を図ることを目的として、1994年に設立され、8月に愛知県知事より「特定公益増進法人」の認定を受けた。さらに、1997年6月には「あいち国際プラザ」がオープンされ、国際交流の拠点として、多くに利用されている。

具体的な事業内容は、

1. 国際交流・国際協力活動の推進
2. 多文化共生の地域づくりの推進
3. 国際化の推進役となる人材の育成
4. 国際化に関する調査研究・情報提供

などである（愛知県国際交流協会ホームページ参照）。

わたしたちは、2015年11月16日に愛知県国際交流協会を訪ね、定住外国人について伺った。そして、定住外国人が抱える多くの問題について知った。

定住外国人が苦勞するのは、ことばの壁である。病気になっても、医師との意思疎通が難しいため、病院に行かない人がいたり、行ったとしても何の病気かわからないままだったりする。その解決策として、医療通訳が用意されており、在日外国人の人々にとって、とても重要な役割を果たしている。しかし、大きな病院にしか医療通訳がないことや、通訳の大半がボランティアで賄われ、人数が足りていないことが課題である。

ほかにも日常のトラブルも多い。学校でのトラブルやいじめ、ごみの出し方の違い、文化や習慣の違いからくるご近所トラブルなどがある。具体例を挙げると、ブラジル人には友人や家族と集まってパーティーをする習慣があり、その習慣が騒音トラブルにつながることもあるという。日常のトラブルを解決するため、愛知国際交流協会主催の法律相談があり、在日外国人の人びとは無料で相談を受けることができる。

在日外国人の人びとがことばの壁を克服するため、愛知県国際交流協会は日本語教室を開催している。日本語教室講師の90%がボランティアで賄われ、そのほとんどが60歳以上である。病気で亡くなったり、体力が減少し引退したりする方もあり、ボランティアの高齢化、減少が問題となっているという。

阿波根夕暉、小谷直樹、田中将平
崔月、野津真琴、李珊娜

外国人登録者数 平成25（2013）年末現在

県内総人口 7,435,247人

外国人登録者数 197,808人（割合2.66%）

1	ブラジル	48,730人
2	中国	46,680人
3	韓国・朝鮮	36,569人
4	フィリピン	27,519人
5	ペルー	7,279人
6	ベトナム	6,621人
7	その他	24,410人

出典：

「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況（平成25年末現在）」

<http://www.pref.aichi.jp/0000072886.html>

愛知県国際交流協会

住所：

〒460-0001

名古屋市中区三の丸2-6-1 愛知県三の丸庁舎内

電話：

総務企画課 総務管理担当 052-961-8744

企画情報担当 052-961-7903

交流共生課 交流担当 052-961-8746

共生相談担当 052-961-7902

E-mail：

総務企画課 総務管理担当 somu@aia.pref.aichi.jp

企画情報担当 joho@aia.pref.aichi.jp

交流共生課 交流担当 koryu@aia.pref.aichi.jp

共生相談担当 sodan@aia.pref.aichi.jp

ホームページ：

<http://www2.aia.pref.aichi.jp/>

（英語、中国語、ハングル、スペイン語、ポルトガル語）

あいち国際プラザ

開館時間：

月曜日～木曜日、土曜日 10:00～18:00

金曜日 10:00～20:30

休館日：

日曜日、祝日、年末年始（12月29日～1月3日）

名古屋国際センター

名古屋国際センター（NIC）は、名古屋市の国際交流や多文化共生の推進のため、1984年に開設された総合拠点施設である。1997年12月の名古屋市議会の「名古屋市基本構想」議決を経て、1978年に策定された「国際文化村構想」で設立された国際文化村が前身だ。

名古屋国際センターでは、以下のような活動がおこなわれている（名古屋国際センター ホームページ参照）。

1. 多言語による情報提供や相談

情報カウンターで問い合わせや相談に応じているほか、外国語放送などでタイムリーな情報提供をおこなっているほか、世界の国や地域を紹介する図書・資料・地図・ビデオ、海外の新聞・雑誌など閲覧することのできるライブラリーもある。

外国人向けに、専門相談員による行政相談（6カ国語）、弁護士による法律相談（4カ国語）、カウンセラーによるこころの相談をおこなっている。海外勤務にともなう子どもの教育・生活問題について、情報提供と相談をおこなう海外児童生徒教育相談もある。

NIC NEWS（日本語、隔月刊）、NAGOYA CALENDAR（英語、ポルトガル語、月刊）の2種類の情報誌を発行する。

2. 多文化共生の推進

外国人住民が安心して暮らすことができる「多文化共生社会」の実現を目指して、日本語教室や九番団地子どもサッカー教室などを開催する。

外国人児童生徒サポーター養成、日本語ボランティア育成・支援もおこなう。

3. 国際交流、国際理解の機会提供

NIC 地球市民教室、JICA 中部との協働による地球市民セミナー、ワールド・コラボ・フェスタなどを開催する。

4. ボランティア制度の運営

5. 国際留学生会館の運営

2015年10月14日、名古屋国際センターを訪問した。名古屋市では、韓国・朝鮮、中国、日系ブラジル人など定住外国人約6万が暮らしている。これら定住外国人は、ことばの問題を抱えて、名古屋国際センターに相談に来るという。お知らせや周りからの情報が伝わらなかったり、ごみの出し方など生活情報が限られていたりするという苦労があるそうだ。

神納和希、立島誠人、服部菜穂、藤井諒、葉政延

外国人登録者数 平成25（2013）年末現在

市内総人口 2,272,075人

外国人登録者数 66,289人（割合2.92%）

1	中国	22,454人
2	韓国・朝鮮	18,769人
3	フィリピン	7,409人
4	ブラジル	3,989人
5	ベトナム	1,800人
6	ペルー	825人
7	その他	11,043人

出典：

「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況（平成25年末現在）」

<http://www.pref.aichi.jp/0000072886.html>

名古屋国際センター（NIC）

住所：

〒450-0001

名古屋市中村区那古野一丁目47-1

電話：

総務課 052-581-5678

情報カウンター 052-581-0100

ライブラリー 052-581-0102

交流協力課 052-581-5691

E-mail：

総務課 nic@nic-nagoya.or.jp

情報カウンター info@nic-nagoya.or.jp

ライブラリー info@nic-nagoya.or.jp

交流協力課 koryu@nic-nagoya.or.jp

ホームページ：

<http://www.nic-nagoya.or.jp/lang.htm>

（英語、中国語、ハングル、スペイン語、ポルトガル語、ベトナム語、フィリピン語）

開館時間：

火曜日～日曜日 8:45～17:15

情報サービスコーナー、ライブラリー

火曜日～日曜日 9:00～19:00

休館日：

月曜日、2月・8月の第2日曜日、

年末年始（12月29日～1月3日）

名古屋朝鮮初級学校は名古屋市中区にある私立学校である。2004年4月名古屋市内にあった愛知朝鮮第一、第二、第三初級学校を統合し、第一初級学校の校舎で校名を名古屋朝鮮初級学校と改め、開校した。戦後まもない1945年9月25日にはじまった名古屋市とその周辺の民族教育は、2000年までのあいだに小規模の国語講習所を含め、十数校が統廃合を繰り返し、現在にいたる。

生徒は、おもに在日韓国・朝鮮人同士のあいだに生まれた子どもや、日本人と在日韓国・朝鮮人のあいだに生まれた日本国籍ではない子どもたちである。なかには日本国籍の生徒もいる。教員もおもに在日だが、日本人の教員もまれにいるという。

日本における在日韓国・朝鮮人の定義は、日本に在留する韓国・朝鮮籍の者のうちとくに特別永住者のみを指したり、韓国・朝鮮系日本人（日本国籍取得者や、祖先が韓国・朝鮮籍であるが日本国籍で生誕）を含めたりと、その範囲が変わることもあるが、多くは、「政府の公式の統計情報として記録されている日本に在留する韓国・朝鮮籍の者」と定義されている。しばしば、「在日」と短縮して呼ばれている人びとのことである。

名古屋朝鮮初級学校が教育理念としては掲げているのは、日本社会で生活するための幅広い知識を備え、韓国・朝鮮と日本、世界で活躍できる人材を育成するということである。

そのため、名古屋朝鮮初級学校では、在日コリアンとしての民族的アイデンティティをもつことを大切にしている。母国語である朝鮮語をはじめ、朝鮮の歴史・地理・社会・民族文化・伝統などの科目に力を入れている。もちろん、日本の小学校同様の科目も教えている。とくに言語教育に重点を置き、バイリンガル教育に力を注いでいる。たしかに学校を見学したとき、生徒同士、朝鮮語で会話していたが、わたしたちが話しかければ、丁寧な日本語で答えてくれた。

生徒の大半は生まれたときから日本語をつかい、学校でのみ、朝鮮語をつかうのが一般的である。そのため、生徒たちは朝鮮語を日常的につかっているのではなく、学校で習っているというのが現状だ。だから、朝鮮語がある程度のレベルまで上達するには小学校から高校、大学までの教育が必要である。

朝鮮初級学校の生徒の卒業後の進路としては、ほとんどの生徒が朝鮮中級学校に進学するが、なかには日本の中学校に通い始める生徒もいる。その際、学力的な差が出ることはないが、掛け算の九九などを朝鮮語で習っているため、日本語で九九が言えないというような問題が少なからず生じるそうである。

日本での生活全般においての苦勞として挙げられるのは、国籍の障害である。具体的な例を挙げると、就職のとき、韓国・朝鮮の国籍というだけで落とされたり、家を探す際も、国籍が韓国・朝鮮というだけで入居を拒否されたりとさまざまな障害があるそうだ。だが、日本国籍をもつ在日の場合、通名を名乗り、みずから在日だと明かさなければ、気づかれることはほとんどないという。

今回の訪問の際、話のなかに「在特会」という団体の名前が出てきた。この在特会とは「在日特権を許さない市民の会」という日本の市民団体で、在日朝鮮・韓国人をほかの外国人と平等に扱うことを目指すということを指針として掲げている。在特会がほかの外国人と在日朝鮮・韓国人が不平等だと主張している理由は、在日朝鮮・韓国人がもつ在日特権である。そのなかでも「特別永住権」が批判対象として大きく取り上げられている。

しかし、「特別永住権」が「権利」なのかというと、実際にはそのような扱いを受けることはできていない。「特別永住権」はあくまで「許可」であり、強制退去の対象になったり再入国許可の対象になったりしている。在特会はこのように特別という言葉の勘違いし、きちんとした歴史認識や現状認識もせず活動しているように思える。そして、彼らの行動はかなり卑劣で非人道的であり、目に余る部分がある。



その在特会の事件の一つとして知られているのが2009年12月～2010年3月に京都で起きたものだ。在特会会員らは、京都市の朝鮮学校の周辺で3回にわたり、拡声器などを使用して、「朝鮮学校を日本から叩き出せ」「朝鮮人を保健所で処分しろ」などと発言した。そのほかにも在日に対するヘイトデモがおこなわれ、そのことが報道されている。その際、マスメディアが在日に対して批判的な報道をした場合、一番被害に遭うのは朝鮮学校の子どもたちである。

現在約70万人の在日外国人の人びとが生活基盤を日本において、不十分な行政の風にさらされ、ときには、無理解な日本人から差別を受けている。韓国・朝鮮の人びとがこれほど多く日本に住んでいるのは、日本の侵略・植民地支配の結果であることにほかならない。わたしたち日本人は、これらの人びとがどんな思いで暮らしているのか、またどんな生活を強いられているのかを知らないだけでなく、よく知ろうともせず今日まで来たのではないだろうか。

ある在日韓国・朝鮮人の女子生徒を例に挙げると、中学1年の新学期がはじまってすぐのころ、クラスの生徒とのいざこざのなかで「朝鮮人だったら朝鮮学校に行け！」と大声で言われ、その場でうつむいて泣き崩れたという。また、その女子生徒が2年生のとき、休憩時間中に危険な遊びをしていた男子生徒をたしなめたときに「朝鮮人！」とその男子生徒から言われ、家に帰って泣いて訴えたことがあった。「なぜ朝鮮人という理由でいじめられなければならないのか」と。子どもからの切実な訴えを聞いた母親の心の痛みはどれほどのものだったのだろうか。誰もが出自を選ぶことはできないし、ましてやそのことを理由に人からいじめられ、差別されることはあってはならない。しかし、自身も職場や近所から差別されているのを我慢しているという理由で、子どもから訴えられても我慢しろという親もいる。

在日韓国・朝鮮人の子どもたちには、朝鮮の言語や文化や歴史を学習する権利があり、子どもの権利条約でも保障されている。しかし、その権利が侵害されていることが多々ある。その権利を守るために、わたしたちがどのように考え、行動するかが大切になってくるだろう。

在日韓国・朝鮮人に対する考えはそれぞれであるが、現在の在日韓国・朝鮮人の問題のすべては、過去の大人たちが引き起こしてきた問題なのだ。そのなかで生まれた、相手に対する悪いイメージを子どもたちに植え付けることは、現状の悪化しか生まないだろう。現在のネット社会では、いろいろな情報を簡単に入手できる。わたしたちは今回在日韓国・朝鮮人の人びとについて知ろうとした結果、日本人によって受ける在日韓国・朝鮮人の多くの苦痛を知った。おもに在特会の活動内容や在日朝鮮・韓国人に対する偏見からくる社会的差別などだ。すべての事柄が真実だとは思わないが、一部は真実であることに間違いない。

今回、授業の一環として、この在日問題に触れ、報告書を作成するにあたり、いろんなことを調べたが、この問題について考えを述べるのには知識があまりにも足りないことに気づいた。この問題について考えるならば、ひとつの分野の知識だけでは到底足りない。このような社会的問題に限らず、ひとつの問題を考える場合には、あらゆる視点からの思案が必要である。この在日問題には法律に関する知識、歴史に関する知識は必須であろう。そのほかにも、双方の民族アイデンティティや社会問題なども踏まえ、複合的に考えなければいけない問題だ。

しかし、このように考えていったとしても、この問題にはこれが正しいという答えがないようにわたしたちには思える。あらゆる意見・答えがあって、しかるべきなのだ。だからと言って、わたしたちは在特会のような団体の活動に賛同しているわけではない。

差別的な発言・行為を受けたという在日韓国・朝鮮人のなかには公の場での差別的批判を受けた者もいるが、インターネットやスマートフォンでの情報のやり取りが主流な現代、ネットでの誹謗中傷に心を痛めた者もいる。ネットの発言はどこの誰が言っているかわからないものが大半である。だが、その発言に少しでも歴史や法的意見が混じっていると妙な説得力が増すのだ。そして、そこから、また、わけのわからない議論がはじまる。

この在日問題はとても複雑な問題であるがゆえに、さまざまな意見があり、ネット上ではさらに多くの意見・情報が飛び交っている。そこで大切なのはその情報を鵜呑みにするのではなく、ひとつの意見として捉え、広い視野をもち、複合的に考える力を身につけることが大切であるだろう。

阿波根夕暉、崔月、野津真琴、李珊娜

<参考資料>

田中宏・鄭英桓・荻上チキ. 2015. 「在日韓国・朝鮮人の戦後歴史——「特別永住資格」の歴史的経緯とは」
2015年12月27日アクセス. <http://synodos.jp/society/13054>

わたしたちは、外国人定住者の子どもたちの日本語の勉強がどのような状況かを知るため、2015年11月8日、名古屋市中村区にある名古屋国際センター主催の日本語教室を見学した。国際センター4階にある事務所で、われわれと国際センター職員との簡単な自己紹介をしたあと、日本語教室についての説明を受けた。国際センター職員を中心に20～30人のボランティアの方がたは、軽く打ち合わせをおこない、授業に備えていた。

先生役をやっているボランティアの方がたは30～60代が多いようだった。かれらは国際センターから配布された資料をつかって授業をおこなうのだが、国際センター職員は簡単な打ち合わせ以外は日本語の授業に関与せず、ボランティアの方がたの自由な教育に身を任せていた。ボランティアの方がたは、生徒たちの授業を優先し、時間を無駄にしないために、一生懸命努力をしているようであった。また、この日は県立千種高校の2年生の4人の女子生徒たちが、ボランティアの先生役として参加していた。

この子ども日本語教室は定員50人で、2015年11月現在49人の生徒がいる。あまりにも人気が高すぎて毎学期定員オーバーだという。小学生から高校生の年代の生徒だが、なかには高校に通えていない生徒もいる。母国で中学を中退したまま日本に移住したために、高校への進学権をもたなかったり（中卒扱い以下）、日本との教育制度が違うため、もう一度中学校を繰り返していたり、理由はさまざまである。

わたしたちは実りある濃い見学にするため、子ども日本語教室の生徒たちに取材できるかどうか伺ってみた。しかし、「かれらの授業する時間を優先、大切にさせてもらっている。授業後であっても、すぐに帰さなければ親が心配するので取材は断らせてほしい」と言われた。生徒たちからの直接的な感想を聞くことができずにとて残念だったが、生徒たちの教育、保護を優先してしっかりとした教室であると感じた。

生徒はフィリピン系の名前、インド系の名前、中華系の名前などさまざまな民族の生徒たちが日本語を学んでいた。また、名前が日本人のような生徒や日本人のような顔の生徒（名前はカタカナであった）も、この教室で日本語を学んでいた。年齢はバラバラで、ボランティアの方がたより3倍ほどいた。

日本語教室の授業は、小学生と中学生以上のチームに分かれておこなう。ボランティア1人に対し、授業を受ける生徒が2人つき、授業を展開するスタイルである。ここで日本語の力の差を意識しクラス編成をしているのだ、と思われた。小学生チームの授業内容は、漢字、ひらがな、絵本の読み聞かせ、パズルをつかった簡単な「あいうえお」、曜日の言いかた、比較的簡単な会話である。ほかにも日常的な漢字の言葉の意味を勉強する。たとえば「夕方なら、夜になる前」と教え、簡単な会話は、1週間の日記を書かせ、それを声に出して読ませる。またプロフィール表を書き、日本語で互いを自己紹介していた。

A～Fのグループに分かれており、Aグループがもっともレベルが高いようにみえた。とくに中華系の生徒が日本語の習得も早く、ほかの生徒よりも日本語をうまく話せており、意欲が高いようにも思えた。小学生チームはとても楽しそうに授業を受けており、われわれがみる限りいやいや受けている生徒はいなかった。比較的年齢が高い生徒も交じっており、小学生と中学生で分けるわけではないのかもしれない。

中学生以上のチームの教室は、入ってみると小学生チームの教室とは明らかに空気が違い、まるで図書館のなかにいるような感覚に陥った。そこでは各生徒たちがまじめに授業に取り組んでおり、日本語を必死に習得しようという意欲がみてとれた。名詞の勉強、日付の読みかた、小学生チームとは違う辞書をつかったレベルの高い授業、日本語文法、難易度の高い漢字、難しい日本語の授業、ほかにも高校受験に向けた科学や数学の授業、日本語とはまったく関係のない英語の授業など、まるで塾のようだった。中学生以上のチームではあったが、なかには小学校レベルの漢字を学んでいる生徒もいた。

名古屋に住んでいるさまざまな国籍をもった子どもたちが一生懸命、日本語を学んでいた。今回、日本語教室を見学してみてわたしたちの考えが変わった。

わたしたちは、日本語教室という堅苦しい名前からして、生徒たちがいやいや日本語を学んでいると思っていた。しかし、生徒たちは自主的に取り組んでおり、わたしたちの先入観は取り除かれた。

この教室に来て、よい意味で期待を裏切られた。この日本語教室では生徒たちが自主的に学び、ボランティアの方

がたは生徒たちに実の子どものように接し、国際センター職員はボランティアを全面的にバックアップし、とてもよい環境で学んでいると思った。

小谷直樹、立島誠人、葉政廷

九番団地子どもサッカー教室

<http://auladokyuba.web.fc2.com/>

2003年4月からはじまった九番団地子どもサッカー教室は、外国人児童の居場所づくりと日本人児童との交流を目的に、おもに港区に暮らす子どもたちを集めて、名古屋市立東海小学校の校庭で開催されている。実質的な運営は、名古屋国際センター、九番団地で日本語を教えるボランティアグループ「九番団地日本語教室」のボランティア、そしてこの事業に賛同して集まった有志がおこなっている。

海外から来て日本の環境になじめず、不就学・不登校になってしまった子どもたちを集める方法としてサッカー教室を開き、就学児童と交流するなかで就学への関心を喚起し、学校に足向けさせるのが当初の狙いだったようだ。しかし現在、参加者の多くは学校に通っている子どもたちだ。「不登校に陥ってしまうかもしれない要因を、その芽が小さいうちに気付いて摘み取る場になれば教室の存在意義は十分にある」という。

最近では、サッカー教室を楽しみにして、毎週欠かさず参加する子どもたちも出てきた。また、子どもの親と頻繁に連絡を取るうちに、子どもたちの生活実態もみえてきた。共生への取り組みを進めていく上で、かれらの生活実態を把握することは重要だという。つまり、サッカーというスポーツをするだけではなく、チームプレーを通して集団社会でのルール、マナーを学ぶ場になることを目指しており、人と人とのつながりをつくるのが大事なのである。

しかし課題も多い。外国人の地域参加という視点からも、教室の運営を外国人住民に任せるのが目標だが、これまでのところブラジル人住民で主体的に運営に関わろうとする人はいない。サッカー教室に通う児童の保護者など身近なところから呼び込み、ゆくゆくはリーダーシップをとれる外国人住民を中心にした継続性のある自主運営に移行していきたいそうだ。

わたしたちは、2015年11月21日に九番団地子どもサッカー教室に参加した。サッカー教室に参加する子どもたちは、ブラジルをはじめペルー、ベトナムなどさまざまな国の子どもたちだった。保育園くらいから中学生までの幅広い年齢層から構成されていて、低学年と高学年の2グループに分かれて活動していた。

低学年のグループについては、サッカーをする前に担当の人から、「ケンカをする可能性が高いので、できれば一人ひとりの内面を気にしてあげてください」と言われた。なるべく全体を見渡すように心がけていたが、グループの輪に入りがたがらない子が出てきたり、文化の違いからなのか言い合いのようなことも起こったりした。日本語ができない子どもに対して、日本人らしき子どもが「外国人！外国人！」と叫んでいた。言われた本人は理解できていなかったが、これが「排除」なのかと驚いた。なんとか機嫌をとることはできたが、子どもたちをまとめる難しさを感じた。

いっぽう、高学年のグループは、低学年の子どもたちと比べて、考えがしっかりしているのか、ケンカなどはなかった。高校1年生で、長くサッカー教室に通っているA君が、うまくみんなをまとめていたのも理由の一つではないかと思う。

海外移住が身近になり、日本にも外国人労働者が増えてきている。その人たちが異文化のなかで生活すれば、さまざまなストレスを感じるに違いない。そうしたなかでこのサッカー教室のように何かを通してその地域に馴染み、交流できる心のよりどころのような居場所づくりがあるのとないのでは、生活がかなり違うと思う。もちろんこのような居場所づくりはサッカー以外のスポーツでもいいし、すでに存在している「九番団地日本語教室」のようなものでもいい。交流手段はいくらでもある。また、逆に移住してきた外国人が日本の子どもたちに、自分たちの国の言語やスポーツを教えるというのも、ボランティアでは厳しいかもしれないが、盛んにおこなわれればいいと思う。

今回サッカー教室に参加したわたしたちは、サッカーを教えられるわけでもないし、特別子供に慣れているというわけでもない。しかし、このサッカー教室を通して外国人の子どもとの関わりかた、地域の関わりかたなど、普段できない貴重な体験をしたと感ずることができた。また機会があればほかの友人たちも誘って参加してみようと思う。

神納和希、田中将平、服部菜穂、藤井諒

安城市国際交流協会

安城市国際交流協会は、1982年に設立された団体であり、安城市役所の西会館に事務局がある。市民に広く国際交流・異文化理解への関心を高めるとともに、積極的に各種交流事業をおこなうことにより、国際意識の高揚と諸外国との相互理解の促進を図ることを目的とする。

現在、ハンチントンビーチ市（アメリカ・カリフォルニア州）、ホブソンズベイ市（オーストラリア・ビクトリア州）、コリング市（デンマーク・南デンマーク州）の3つの都市との姉妹都市交流や、安城市在住外国人への支援、市民と外国籍住民との交流などを推し進めるため、幅広く活動している。姉妹都市を中心とした諸外国との友好・交流や多文化社会における地域の国際化のため、姉妹都市交流事業、国際理解講座開催事業、多文化共生事業、日本語教室開催事業、ボランティア育成および支援事業、広報啓発事業などの事業をおこなっている。

姉妹都市交流事業では、前述の通り、3姉妹都市への学生の派遣、3姉妹都市から学生の受け入れを毎年実施している。また、3都市と市民や産業後継者の派遣や受け入れ、市民交流、地元作家の美術品交流などもおこなっている。

つぎに国際理解講座開催事業だが、異文化理解を促進させるために英会話講座、国際理解講座を市民向けに開いている。

多文化共生事業においては、外国人住民に対し、日本文化や日本の習慣を理解してもらうための事業や、国籍に関わらずお互いの力を認識しながら生活することの理解講座やワークショップを開催している。例を挙げると、施設巡りや防災講座、多文化共生ワークショップなどがある。

日本語教室開催事業では、市民交流センターにおいて、外国人住民を対象にした、ボランティアによる日本語サルビアの会が開かれている。日本語教室開催事業でのボランティアや通訳ボランティアの方たちの研修やスキルアップ講座などをボランティア育成および支援事業もおこなわれている。

最後に、広報啓発事業では、姉妹都市を紹介する姉妹都市展が開催されている。また、姉妹都市へ派遣された学生・市民の報告書集である「友好」、協会の事業案内などを掲載した機関紙「協会だより」が発行されている。

丸下友理恵、渡辺菜月

外国人登録者数 平成25（2013）年末現在

市内総人口 181,717人

外国人登録者数 5,605人（割合3.08%）

1	ブラジル	1,903人
2	フィリピン	1,446人
3	中国	1,017人
4	韓国・朝鮮	347人
5	ベトナム	209人
6	ペルー	118人
7	その他	565人

出典：

「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況（平成25年末現在）」

<http://www.pref.aichi.jp/0000072886.html>

安城市国際交流協会

住所：

〒446-8501

安城市桜町18-23 安城市役所 西会館

電話：0566-71-2260

ホームページ：<http://anjo-kokusai.jp/>

（英語、ポルトガル語）

わたしたちは2015年11月21日に、安城市国際交流協会が開催している事業の一つの外国人居住者に向けての日本語教室「サルビアにほんごの会」で、外国人居住者がどのように勉強し、日本語学習に苦勞をし、習得しようとしているのかを見学してきた。

安城市の2015年9月のデータでは、市内総人口は185,548人。そのなかで外国人登録者数は5,652人、総人口の約3%を占める。安城市に住んでいる外国人登録者のなかでもっとも多いのは、ブラジル出身の人びとであり、1,912人であった。次に多いのはフィリピン出身の方がたで1,532人である。そして中国人が1,011人とフィリピンの次に多く、そのほか韓国・朝鮮、ベトナムなどの国の出身者1,197人が安城市には居住している。

「サルビアにほんごの会」は、毎週土曜日に安城市民交流センターで午前10時～11時30分の1時間半開かれている。さまざまな国から来ている人がおり、「サルビアにほんごの会」は生徒個人票で個人個人を把握している。個人票には、どの国から来ているのか、いつ「サルビアにほんごの会」に入り、日本語教室での勉強の進行速度はどのくらいか、などが記入されている。

現在「サルビアにほんごの会」で日本語を学んだことがあるのは、15の国の人びとである（ベトナム、バングラデシュ、ミャンマー、ベルギー、イギリス、ブラジル、ペルー、フィリピン、インド、中国、インドネシア、スリランカ、韓国、タイ、モンゴル）。そのなかでもっとも多いのは、フィリピン出身の人であった。わたしたちが見学に訪れた際は、ベトナムと中国の方が多く来ており、生徒は15人ほどであった。

日本語を学びに来ている方がたは、日本語を勉強するためのテキストとして、わたしたち日本人が小学校などで使用する漢字ドリルや、低学年向けの日本語の図鑑などを使用していた。生徒によってレベルは違い、わたしたちが見学したときに参加していた外国人居住者の方がたは、1人を除いて簡単な日本語を喋れるようであった。1人、日本語をまったく喋れないレベルの方は、この日本語は英語でこういう意味だ、ということをおぼわっていた。

日本語を教える方がたはボランティアで、年齢層はさまざまであった。希望をすれば誰でもボランティアとして日本語を外国の方に教えることができる。わたしたちが見学したときのボランティアの人数は8人であった。同じ国出身の人同士でかたまり、ボランティアの方に教わっている場合や、教室に同国出身者がいてもレベルなどによって分かれているようだった。生徒数に比べ、ボランティアの数はいつも少ない人数しかいないようだ。生徒3人に対し1人で教えることはたまに大変と感じると、あるボランティアの方が話していた。教室に同じ国籍の人がいない場合は、ボランティアと生徒はマンツーマンで日本語の勉強をする。

日常会話などはだいぶ喋れるが、漢字と文法が苦手だというベトナムの方と話をさせていただいた。かれらは、日本語検定の勉強をしているという。ベトナムでは「う」という発音がないので、工場勤務の男性は、最初自分が働いているのが工場だ、ということをおぼえなかったそうだ。また、ベトナム語では「つ」が「ちゅ」と同じ発音なのでつかい分けるのが大変だと話していた。「上達」という漢字をボランティアの方が教えていたが、「達」という漢字自体に加えて、発音も難しいようだった。わたしも漢字は苦手だったので、ベトナムの人の苦勞話には共感する点があった。

「サルビアにほんごの会」に来ている人はみな、社会人として働いている人たちであった。わたしたちが話を聞いたベトナムの方3人のうちの1人は夜勤明けで辛い、仕方がないと困った顔で言っていた。わたしたちが日本語で何が大変だったか、最初に覚えた日本語は何かと尋ねると、逆に日本人にとって日本語の難しい点は何か、大学の専攻は何か、と興味を示していた。日本語は難しいが、覚えて、同じ工場の人とコミュニケーションをとれるととても嬉しいので頑張りたいとも言っていた。わたしが小学校のときは漢字を書けなくても、携帯電話などがあるし、日本人だから日本語を話せるし、いまさら日本語なんてやりたくないという気持ちだった。ベトナム人の人たちが、こんなにも日本語をまじめに勉強をしているのに驚嘆した。自分が住んでいる市にこのような日本語教室があることを知らなかったのも、もし安城市で日本語を習いたい外国の人がいたら紹介したい。

丸下友理恵、渡辺菜月

一宮市国際交流協会

2015 年 12 月 7 日、一宮市国際交流協会（iia）を訪れ、古橋さんからお話を伺った。

一宮市国際交流協会は、国際交流・国際協調・国際親善への理解と関心を高め、諸国外との相互理解と友好親善を促進し、世界に開かれた地域社会づくりと国際社会の発展を目指すために、1991 年に設立された任意団体である。スポーツ交流会やイタリアフェアなどのイベントや、国際理解セミナーや外国語講座などの実施、ボランティア団体への支援や在住外国人への情報提供など、幅広い国際交流活動からグローバルな地域社会づくりに貢献している。

現在の一宮市の外国人登録者数は 4,874 人で、ほかの市町村と比べると、外国人登録者数は少なく感じる。現在の一宮市の総人口は 379,397 人と多いが外国人登録者数はそのうちの 1.28% にしか達していないのである。知立市 6.18% を筆頭に、愛知県平均は 2.66% となっており、一宮市は平均を下回っていることになる。

しかし一宮市では、外国人に対してさまざまな支援をおこなっている。そのひとつが、2015 年 4 月に作成した「外国人緊急カード」である。日本語が不慣れな外国人が突然の事故や災害に遭った際に、日本人とコミュニケーションをとるためのもので、英語版、中国語版、タガログ語版で作成され、一宮市国際協会窓口や市民課のほか、日本語ひろばなどでも随時無料配布されている。

外国人との交流もはかられている。たとえば、一宮市国際交流協会は 2015 年 6 月から、一宮駅にある中央図書館にて「外国絵本の読み聞かせ」を定期開催している。2015 年 12 月 1 日には JICA 研修員ホームステイも実施された。アフリカなどの地域から来日し、JICA 中部に滞在する研修員の方がたを一宮に招き、ボランティアで募集した家庭でホームステイの体験をしてもらった。

国際交流に取り組んでいるのは、一宮市国際交流協会だけではない。たとえば社会福祉法人・一宮市社会福祉協議会は、一宮市国際交流協会親善ボランティアをおこなっているという。会員は 264 人いて、協会ニュースの作成・発送、日本語教室、ホームステイ受入れ、通訳・翻訳などの活動に携わっている。聴覚障害者を支援するサークルでは、外国人対象の聴こえの不自由な方への筆記でのサポート、手話の学習や社会見学などもおこなっている。

2015 年 11 月には、料理教室で留学生との交流料理会

外国人登録者数 平成 25（2013）年末現在

市内総人口 379,040 人

外国人登録者数 4,863 人（割合 1.28%）

1	中国	1,512 人
2	フィリピン	1,210 人
3	韓国・朝鮮	1,185 人
4	ブラジル	221 人
5	ベトナム	172 人
6	ペルー	115 人
7	その他	448 人

出典：

「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況(平成 25 年末現在)」

<http://www.pref.aichi.jp/0000072886.html>

が開催された。参加者は 29 人で、スイス・台湾・スペイン・中国・ドイツ・スウェーデンの 6 カ国から 9 人の外国人が参加した。そのうち留学生 4 人には自国料理をつくってもらい、参加した 20 人の日本人に披露した。日本人のなかには幼い子どももいて外国人との交流をおこなっていた。

一宮市はイタリアのトレヴィーゾ市と友好都市提携を結ぶなど、グローバルな社会づくりを進めている。

今後も日本語教室をはじめとして、一宮市では外国人と交流する機会がたくさん設けられる予定だそう。一宮市と外国の架け橋となるような行事に積極的に参加していきたい。

五十君有紀、馬淵桃香

一宮市国際交流協会

住所：

〒491-8501

一宮市本町 2-5-6 一宮市役所本庁舎 4 階

電話：0586-85-7076

E-mail：kokusai@city.ichinomiya.lg.jp

ホームページ：

<http://www.city.ichinomiya.aichi.jp/iia/>

2015 年 12 月 5 日、一宮市国際交流協会が主催している日本語ひろばジュニアを見学させてもらった。

日本語ひろばジュニアは、毎週土曜日（祝日、第 5 土曜日をのぞく）午前 10 時～11 時 30 分、ききょう会館 3 階第 1 講習室で開かれている。参加費は無料で、対象は日本語を母語にしない、原則として小中学生である。一宮市国際交流協会は、日本語を学びたい外国人のために、日本語ひろばジュニアのほかにも日本語ひろば（向山公民館 3 階）、日本語ひろばびさい（三条つどいの里）、放課後学修支援教室・寺子屋いちみん（木曾川公民館研修室 B）という 3 つの「日本語ひろば」を開催している。

日本語ひろばジュニアの教室はそこまで広くなく、授業の時間は午前 10 時～10 時 40 分、10 分の休憩をはさんで 10 時 50 分～11 時 30 分であった。高学年になるにつれて、休憩時間なしで続けるそうだ。生徒数は 10 人程度で、先生役をするボランティアの人数も同じくらいだった。しかし、ボランティアなので、来られない人が出てくるともある。日本語を学びたい外国人との人数を合わせるため、ボランティアできる人を随時募集しているそうだ。ボランティアには年輩の方が多いのが印象的であった。マンツーマンで丁寧にボードなどをつかって教えていた。

生徒の国籍のほとんどは中国とフィリピンで、やはり小学生や中学生が多かった。新しく生徒が入ってくる時期は、中国人は 9 月、フィリピン人は 5 月である。その人たちの年代、学力によってまた勉強の教えかたが変わるため、先生は大変だという。

わたしたちも 2 人の生徒を教えさせてもらった。

東は、一宮市の中学 1 年生の M ちゃんというフィリピン人の子どもの担当になった。日本語教室というので、日本語を教えるものだとばかり思っていたが、算数、国語、英語を教えると聞き驚いた。国語と算数を教えたが、国語ではやはり漢字が難しいようであった。M ちゃんはひらがなはとても得意だったが、漢字は知らないものばかりで、はじめて教える自分にとっても難しかった。ボードをつかったり、ジェスチャーをまじえたり、必死で考えて、書き順、音読み、訓読みなど何から何まで教えた。算数では、やり方を教えるとすらすらと問題を解けていたので、覚えるのは速いようだ。しかし、勉強内容は小学 4 年生のレベルだった。授業が終わり、みんなが帰る支度をしているなか、M ちゃんは時間いっぱいまで真剣に勉強する熱心な子どもだった。しかし、教室長の話では、M ちゃんは周りの子とは異なり、支援が行き渡っていないそうだ。勉強がなかなか学年に追いついておらず、本当に基礎から教えないといけないという。M ちゃんは、2014 年に来日したが、2016 年 6 月には帰国するそうだ。

深川は、中学生 2 年の H 君を教えた。H 君は、父が中国人、母が日本人で、国籍は日本にあった。2015 年 7 月に父親の仕事の関係でフィリピンから日本に来た。来日するのは 2 回目だという。H 君は、ほかの生徒と違い子どものときに日本いたこともあり、いまは日本の中学生といっしょに西成中学校に通っていて、部活もおこなっていた。授業は、学校の宿題や自分でもってきた参考書のわからないところを教えることだった。ボランティアの人によると、H 君は、その教室では珍しく年齢に伴った学力と理解力があるという。逆に周りの生徒をみると、日本語の日常会話ができない子、母親とともに授業を受けている子、コミュニケーションをとるのも難しい子どもも多く、ボランティアの人たちも苦労されていた。

日本語ひろばジュニアでは、みんなでご飯をつくったり、ビンゴゲームをするクリスマスパーティを開いたり、たくさんのイベントも企画されている。気晴らしも、教育には大切なようだ。

ボランティアの人たちは、どのようにすれば一番効率よく教えられかなど、たくさんの試行錯誤を重ねていた。しかし、勉強を教えた子どもたちが、その教えたことを理解したときにみせる笑顔がやりがいだという。

自分たちにとって、教えるのははじめての経験だった。人に教えるのが苦手な自分たちだが、教えた子が理解しようがんばっている姿をみて、自分も一生懸命に教えようと思えた。やりがいは笑顔だというのは本当で、笑顔を見せられると、お互い達成感が生まれた気がして、教えていて楽しかった。

東祐斗、深川開斗

岡崎市国際交流協会

わたしたちは 2015 年 10 月 20 日、岡崎市役所のなかにある岡崎市国際交流協会を訪問した。岡崎市が定める多文化共生推進基本指針にのっとって活動する組織である。協会で聞き、印象に残っている話をいくつか紹介したい。

まず、岡崎市には 2015 年 10 月現在、合計で 8,567 人の外国人が住んでいる。ブラジル出身の方が一番多い。その理由は、法律が変わり日系 3 世までなら日本で働けるようになり、それにあてはまる人が多かったのがブラジルだったからだ。ブラジルから来た方は自動車工場で働く人が多いそうだ。

そんなブラジルの方たちを含め、8,567 人のうちの多くは、悩みや苦勞を抱えたまま生活をしている。たとえば、ことばの壁だ。在日日数が長期化していても、日本語が不十分な人が多く、話している内容が理解できない人も少なくないそうだ。しかし、日常会話なら話せる人や、簡単なひらがなやカタカナなら読める人、書ける人も増えてきている。

岡崎市はそんな外国国籍の方をサポートするために、「優しい」日本語をもっと広めたいと考えている。たとえば、重要になってくる防災関係のことは、資料などのすべての漢字に振り仮名を付け、震度という言葉がわからない人のために、簡単に「地面が揺れる大きさのこと」などと説明をしたりしている。完璧な日本語でなくても、簡単な日本語ならば理解できるという人を、増やしているそうだ。

また岡崎市市民協働推進課では、緊急時にすぐ自分の状況を周囲の人に伝えられるように、「指さし会話集」という小さな紙を配り、つねにもち歩いてもらうようにしている。自分の情報を相手に伝えるということを、自分からする習慣をつけてもらうことが重要だからだという。

ことばだけではなく、文化の違いも大きな問題になっている。入学式を知らなかったため、ジーンズを履いて行ったら笑われてしまったり、弁当を知らなかったり、子どもが困ることもあるそうだ。

このようにさまざまな苦勞を抱える外国人のために、岡崎市では相談窓口をつくっている。日本語を話せない人も気軽にきて相談できるように、英語やポルトガル語、中国語を話せる通訳をおいたり、日本を知るための講座を開いたり、外国人向けのパンフレットを多く用意し、岡崎市は多文化共生推進基本指針にもとづいて、「自立を

外国人登録者数 平成 25 (2013) 年末現在

市内総人口 375,162 人

外国人登録者数 9,108 人 (割合 2.43%)

1	ブラジル	3,213 人
2	中国	1,698 人
3	韓国・朝鮮	1,514 人
4	フィリピン	1,511 人
5	ベトナム	348 人
6	ペルー	132 人
7	その他	692 人

出典：

「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況(平成 25 年末現在)」

<http://www.pref.aichi.jp/0000072886.html>

促進する支援」を進めたいと思っているそうだ。この支援には大きく分けて 4 つあり、そのなかでもとくに日本語学習の支援や、日本の生活ルールなどへの理解を促進する支援に力を入れている。前者では、週に何度も日本語教室を開催し、後者では、防災や交通ルール、ごみの分別などをより簡単に、わかりやすく教える講座を開いている。

今回、はじめて岡崎市に定住している外国人の悩みなどを知り、わたしたちができることが少しでもあるのではないかと考えた。他人事だとは思わず、国際化するいま、もっと外国人の方々に手を差し伸べるべきだ。また、年々定住する人が増えていっているため、もらった資料などをしっかり読み、わたしたちが理解しておかなくてはならないことがあることも周りの人に伝えていきたい。

足立七瀬、大場麻由

岡崎市国際交流協会

住所：

〒444-8601

岡崎市十王町 2-9 岡崎市役所 市民協働推進課内

電話：0564-23-6644

E-mail：kokusai@oia1.jp

ホームページ：http://oia1.jp/

(英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語、フィリピン語)

わたしたちは2015年11月8日、岡崎市で一番大きい図書館である岡崎市立中央図書館のなかにある、りぶら国際交流センターを訪問した。岡崎市立中央図書館は「りぶら」と呼ばれ、本を借りたり、勉強をしたり、小さな子どもを遊ばせたりすることができる施設である。岡崎市のシンボルである岡崎城の目の前にあるため、場所がわかりやすく、また通いやすいように交通手段もたくさんある。

国際交流センターは、曜日や時間によって、日本語教室と日本語サロンの2つを開いている。どちらも、外国の方が通っている教室で、おもに日本語を学んだり、住む地域のことや、法律、学校、日本に来てからの悩みについて気軽に相談をしに行ったりする場所だそう。日本語教室でも日本語サロンでも、外国人に教える日本人は、無償ボランティアとして活動をしている。若い方もボランティアとして参加していた。

今回、わたしたちが見学をさせてもらった日本語サロンは、2つの教室に分かれている。教室はとても広く、内装は鮮やかで活気があり、男女の割合はほぼ同じだった。ボランティア講師の方たちも明るい人たちがばかりで、快く受け入れてくださったため、はじめて日本語サロンを訪れたわたしたちでもすぐに馴染むことができた。

どんな国の人が来ても困らないように、外国人用のパンフレットも多くそろえてあった。およそ20種類ものパンフレットが用意されており、外国の方でも楽しくみることができるよう、カラフルで絵もたくさんとり入れられていた。パンフレットの内容は、震災時にすることや、準備しておくもの、そもそも震度とはどういうもののかなど、簡単にわかりやすいことばをつかって書かれている「防災チェックガイド」や、岡崎市はどういうところなのか、有名な食べものや場所はどこなのかなど、岡崎市について詳しく書かれている「岡崎市観光ガイド」などがあつた。

パンフレットのほかに大きな世界地図が飾られていたことが印象に残っている。その世界地図のあちらこちらに多くの国の人の願いや、被災した日本への応援メッセージが書かれていた。メッセージには、「すべての人びとが平和に暮らせまうように」「志高く日本を支えよう」「希望をもとう」など前向きなものが多く、読んでいるわたしたちも勇気がもらえるようなものばかりだった。

多くの人びとの希望や愛にあふれた教室で、日本語が教えられている。教室の1つでは、講師1人外国人3人で1つのグループをつくり、毎週同じ時間に日本語や、日本のルールを教えている。もう1つの教室では、講師1人に対して外国人は約8人で、日本語をある程度理解した人向けになっている。その教室にとりつけられた大きなホワイトボードをつかって、講師が日本の食べものや、文化、マナーについて大まかに説明する。その後グループの1人が質問し、グループ全体でその質問に対する回答を考える。講師が一方的に教えるのではなく、外国人受講者の積極的な参加をうながしていた。

わたしたちは、外国人3人と講師1人のグループに入り、普段していることを見学させてもらうことになった。わたしたちが参加したグループには、ベトナム人2人、インドネシア人1人とその子ども合わせて4人の方が日本について習っていた。ベトナム人2人は25歳で、2人とも技能実習生として日本に来ていた。

受講者である外国人は、さまざまな理由で来日している。たとえば結婚相手が日本人である、大学で留学先として日本を選んだなど、人それぞれ違っていたことが印象的だった。

なぜ、日本を選んだのか、なぜ日本がよかったのか、不思議に思い聞いてみた。日本は安全そう、日本はいい人がたくさんいると聞いたなどの答えが多く、日本について、いい印象をもって来ている方が多いようだった。しかし、実際に外国人受講者と話して、来る前と来たあとの日本の印象が違うことを知った。たとえば、インドネシア人の受講者は、日本がいいところで楽しいはずなのに、言いたいことを日本語で言えず、思っ





ていることをなかなか伝えられなかったり、子どもの入学式で平服を着ていってしまったり、食事の食べかたや食べるものも違うため、子どもの弁当で悩んだりしていた。ベトナム人受講者は、住んでいた国と住んでいる地域のルールが違うため、ごみの分別の仕方で苦労していた。ごみの分別については愛知県はとくに厳しく、可燃と不燃をどこで区別するのがわからないらしい。

日本語を話せるようになりたい、子どもに恥ずかしい思いをさせたくない、また日本のルールを少しでも知っておきたいなど、さまざまな理由で日本語サロンにみずから通っている方がたくさんいた。わたしたち

が参加したグループの受講者も、かたことの日本語だったが、自己紹介や、自分の国について、また日本についての質問、わたしたちについての質問を日本語でできていた。3、4カ月の間で、ここまで話せるようになるには、多くの努力が必要だっただろう。

外国人受講者は、質問して返ってきた答えや、教わった単語、漢字の意味、またわたしたちの名前まで細かくノートに書いていた。わたしたちは大切な連絡、宿題など忘れてはならないことも、覚えればいいとメモすることを怠ってきた。あたりまえのことをあたりまえにできている外国人をみて、日本人として、外国の方に日本について教える立場になって、恥ずかしいことだと考えさせられた。いままでの自分の行動を改めて、あたりまえのことをあたりまえにできるような人になる必要があると思った。

外国の方がどんな悩みや苦労を抱えているか調べ、日本について少しでも知ってもらうために参加した日本語サロンだったが、わたしたちが教えてもらったことや気づいたこともたくさんあり、いい経験になった。この貴重な体験で感じたことや教えてもらったことを、自分のなかで解決して終わらせるのではなく、自分の成長につなげていきたい。しかしそれにとどまるのではなく、外国の方の悩みや苦労が少しでも軽くなるよう、少しでも多くの人に関心をもってもらえるように、わたしたちが努力したい。

足立七瀬、大場麻由

かにえ国際交流友の会

わたしは 2015 年 12 月 16 日、かにえ国際交流友の会 (KIFA) を訪問し、八神さんからお話を伺った。

蟹江町は名古屋市の隣に位置している。蟹江町に住む外国人も、少なくはない。2013 年末の蟹江町の人口総数は 36,631 人。そのなかで、外国人の人口は 1,018 人。韓国・朝鮮人が一番多く、ブラジル、フィリピン、中国とつづく。

友の会は、町民と町内の外国の人びとの相互交流を目的として、1993 年に設立された。事務局は蟹江町役場の政策推進室にある。

友の会は、親睦を深めるボウリング大会やクリスマスパーティーを開いたり、かにえ町民まつりで出店したり、ホームステイの学生を受け入れたり、受け入れてもらったりしている。

年間通じてさまざまな事業が展開されているが、名古屋大学に滞在する外国人研修生のホームステイ受け入れ事業にも、KIFA は深く関係している。

蟹江町は、アメリカに姉妹都市のマリオン市があり、2014 年にははじめて派遣団が来町され、盛大なるウェルカムパーティーが催された。

外国人登録者数 平成 25 (2013) 年末現在

町内総人口 36,631 人

外国人登録者数 1,018 人 (割合 2.78%)

1	韓国・朝鮮	228 人
2	ブラジル	197 人
3	フィリピン	192 人
4	中国	189 人
5	ベトナム	56 人
6	ペルー	42 人
7	その他	114 人

出典：

「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況(平成 25 年末現在)」

<http://www.pref.aichi.jp/0000072886.html>

かにえ国際交流友の会

住所：

〒497-8601

蟹江町学戸 3-1 蟹江町役場政策推進室内

電話：0567-95-9724

E-mail：fujita@nsc.nagoya-cu.ac.jp

ホームページ：http://kifa.la.coocan.jp/

(英語、中国語、ポルトガル語)

日本語しゃべろう会

<http://kifa.la.coocan.jp/syaberoukai/syaberoukai.htm>

わたしは 2015 年 12 月 16 日、蟹江町役場で開かれている日本語しゃべろう会を見学した。

日本語しゃべろう会は、火曜日の午前と土曜日の夜に開かれている。火曜日はいつも開かれているわけではなく、土曜日の夜に集まる人が多いそうだ。無料で日本語を学ぶことができるので、たくさんの外国人の方が参加されていた。

日本語教室に通っている外国人のなかでもっとも多かったのがフィリピン人だった。ほかにブラジル人、韓国・朝鮮人もいた。

日本語しゃべろう会に来ていた外国人にお話を伺うと、日本語を覚えるのは難しいという答えが多かった。仕事の休みの日などは、家で勉強している人もいるそうだ。仕事先でも日本語が通じないことがあったり、文字が読めないことがあったり、困ることはたくさんあるらしい。

たしかに、わたしもアルバイトをしていて、外国人をみかけたり、外国人と話をしたりすることが多い。その人たちとたわいもない話をしていると、ことばが通じないことが多々ある。わたし自身もうまく伝えようと思って、ジェスチャーをしたり、日本語に少し英語を加えてしゃべったりしたりする。そのような積極的な行動によって、心が通じ合うとまではいえないが、仲よくなることはできる。

日本語しゃべろう会では、各国の外国人の方とお話ができ、いい経験になった。

渋江万里亜

豊川市国際交流協会

豊川市の国際交流協会は、外国人との交流会や講演会、語学講座などさまざまな活動をしており、おもに、市民と外国籍の方との協働活動、日本語教室、外国籍のための相談事業などをおこなっている。

豊川市の国際交流協会は 1987（昭和 62）年 6 月 1 日、任意団体として発足され、1990（平成 2）年 4 月 1 日、財団法人として設立。さらに 2012（平成 24）年 4 月 1 日、公益財団法人として改組された。

国際交流協会の目的は、市民の国際交流、国際親善についての理解と関心を高め、市民による幅広い国際交流活動を推進することにより、諸外国との相互理解と友好親善の増進を図るとともに、多文化共生社会における市民間の相互理解および市民の国際社会への参画の促進を図り、豊川市の国際化に寄与することである。

国際交流協会の活動である日本語教室は、昼クラスと夜クラスに分かれている。基本的には教科書をつかっての授業であり、生徒たちの日本語能力に応じて、少人数にグループ分け、またはマンツーマンによる日本語指導である。生徒のレベルや要望により、授業内容を決めている。

日本語教室では、さまざまな国籍の生徒たちがおり、その大半が中国や東南アジアからの技能実習生、外国から迎えた日本人の配偶者である。最近では南米出身の日系人は減る傾向にはあるが、それでも日本語を勉強したい外国人は多い。日本語を学びたい人には、挨拶ができる程度の人から、日本語検定 1 級を取得したい人までさまざまな人である。

その反面、家庭や仕事の都合で辞めていくボランティアが増えている。現在、高校 3 年生から年配の方まで、ボランティアが 30 人あまりだという。日本語教室では在住外国人に日本語を教えるボランティアを募集している。資格や経験は必要ないそうだ。

日本語以外に、外国語講座も開かれている。英語やハングル語、フランス語、中国語、スペイン語講座などがあり、入門、初級、初中級、中級などのレベルに分かれている。

国際交流協会が事業としておこなっている活動の一つである、外国籍の方のための相談事業では、スペイン語、英語、中国語による生活相談、情報提供をおもにしている。

わたしが住んでいる豊川市にはたくさんの外国籍の方が住んでいることを改めて知ることができた。わたしの

外国人登録者数 平成 25（2013）年末現在

市内総人口 181,285 人

外国人登録者数 5,065 人（割合 2.79％）

1	ブラジル	2,360 人
2	中国	695 人
3	韓国・朝鮮	677 人
4	フィリピン	492 人
5	ペルー	442 人
6	ベトナム	71 人
7	その他	386 人

出典：

「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況（平成 25 年末現在）」

<http://www.pref.aichi.jp/0000072886.html>

通っていた小学校にはブラジル人の生徒が多かったため、外国籍の生徒のためのクラスがあったり、ブラジル人の生徒たちが主催する「アミーゴ集会」と呼ばれるものがあったりした。小学生のころから外国籍の方と交流する場が周りにはたくさんあったことに気づかされた。

大須賀夢

豊川市国際交流協会

住所：

〒442-0878

豊川市新道町 1-1-3

電話：0533-83-1571

E-mail：oiden.tia@toyokawa-tia.jp

ホームページ：http://toyokawa-tia.jp/

（英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語）

休館日：土曜日、日曜日、祝日

学校法人カンティーニョ学園は、愛知県豊橋市にあるブラジル政府が認可する在日ブラジル人向けの学校である。

カンティーニョ（CANTINHO）学園の名前は、「角」という意味の名詞「CANTO」という単語に、「小さい」という意味の「INHO」がつけられたものである。「カンティーニョ」の空間にいれば、日本という違う国のなかでも大好きなブラジルを感じることはできる。子どもたちにとっての居場所でありたい。このような思いから、カンティーニョ学園と名づけられたという。

カンティーニョ学園は、子どもたちの発達をうながし、変化の激しい現代社会や国際社会で生き抜く人材を育成することを目指している。

この目標に向けて、教育方針、オブジェチーボの教材にのっとったカリキュラムを構築、年間行事などすべてのプログラがブラジルと同じように進められている。オブジェチーボとは、1965年にブラジル・サンパウロで設立され、幼児教育から高等教育・大学入学準備教育にいたるまでを幅広く手がける南アメリカ最大の私設教育機関だ。オブジェチーボと提携している学校は、ブラジル国内では450校以上を数え、サンパウロ市内では200校以上存在している。生徒数は国内・国外（日本）で43万人以上になるといわれ、充実した教育設備と豊富な教育経験にもとづき独自に開発した教材は、ブラジルでも高い評価を受けているという。

カンティーニョ学園は、オブジェチーボ教育指針に沿って、学生一人ひとりを個人としてつねに尊重した教育を目指している。そして課題を計画・実行する際に、必ず各生徒の知識レベル、学習リズム、モチベーションを考慮し、それぞれがもつ個性や得意分野を尊重している。

カンティーニョ学園では、日本にいながらブラジル同等の教育が受けられ、ブラジルに帰国したあとも再教育を受ける必要がない。

カンティーニョ学園は、12学年制で対象年齢は6～18歳である。基礎および中等教育の学校で、日本の初・中・高等学校にあたる。就学前教育もおこなわれており、3歳から受け入れられている（0～3歳までが乳幼児、4～5歳までが幼稚園と規定されている）。初等教育は1～5年生までの5年間で、「前期初等教育」と呼ばれ、日本の小学生にあたる。生徒の年齢は6～10歳だ。そして、6～9年生までの4年間は、「後期初等教育」と呼ばれ、日本の中学校にあたる。

ブラジルでは初等教育とはいえ、年齢ではなく学力に応じた進級をおこなっているため、各学年にさまざまな年齢の生徒が在籍しているところが日本と大きく異なる。中等教育はおおむね、15～17歳までの3年間で、日本の高等学校にあたる。カンティーニョ学園では、この中等教育までを受けることができる。

わたしが通っていた中学には、たくさんのブラジル人がいた。まだまだ日本語がうまに話せないブラジル人生徒もいるため、ポルトガル語を話すことができる先生も1人いた。このような生徒は、自分のわからない授業になるとブラジル人用の教室に行き教えてもらっていたが、そのほかは日本人と同じように給食を食べたり、行事に参加したりしていた。

わたしの同級生にもブラジル人が2人いた。1人は親の都合で夏休みにブラジルに帰ってしまった。夏休みが明けると、残ったもう1人は、先輩や同級生にいじめられていた。わたしは、その生徒を助けることができなかった。その生徒は、1年生のあいだは学校に通っていたが、2年生になると不登校になった。あのとき、話を聞いていたり、先生に相談したりしていたら、少しは変わっていたのかもしれない。

しかし、3年生になると、福島からブラジル人の転校生が来た。不登校になった生徒とは、すぐに仲よくなっていた。先輩も卒業し、いじめる人もいなくなった。福島からブラジル人が転校してきてくれて本当によかった。後輩にもブラジルの人がたくさん入ってきたため、とてもにぎやかになった。

溝口真由

結びにかえて

2015 年 4 月、名古屋学院大学では国際文化学部（国際文化学科、国際協力学科）が新設された。本報告書「多文化共生に向けて～愛知県各自治体の取り組み～」は、国際協力学科第 1 期生が発展セミナー（佐伯担当）においてまとめたものである。

発展セミナーは、2 年次以降のより専門的な学習に向け、国際協力を考えるための基礎的な学習を、学生たちが協働しておこなう場である。まず身近な国際協力について理解してもらいたいという思いから、学生たちの暮らす地域の自治体が、外国籍の人びとにどのような支援をおこなっているのか調査してもらった。その際、外国籍の人びとがどのような生活を営んでいるのか、どのような困難に直面しているのかを知るために自治体の国際交流協会、そして実際に国際協力を体験するために日本語教室や外国人学校を訪問することを課題とした。学生たちが外国籍の人びとと出会うことで、「多文化共生」の第一歩を踏み出すことにつながるという期待もあった。

高校を卒業して間もない学生たちは、この発展セミナーで、おそらくはじめて調査を実施することになった。見学の許可をとり、国際交流協会や日本語教室で話を聞き、その成果を文章でまとめるまで、学生たちは試行錯誤を重ねた。不慣れな学生たちを暖かく迎えてくださった方がたに、この場をお借りして心よりお礼申し上げたい。

個人的なことだが、国際文化学部開設にともない、わたし自身も生まれ育った東京から名古屋に拠点を移した。愛知県は、わたしの調査研究の現場であるインドネシアの人びとが、日本でもっとも多く暮らす地域である。名古屋に来て、これらインドネシア人の相談を頻繁に受けるようになった。ビザ、事故、病気、子どもの教育など日常のさまざまな問題を解決するため、日本語がけっして十分とはいえないかれらのため、役所や病院などに付き添って驚いた。役所には「外国人住民」という窓口が設けられ、病院の受付では通訳ボランティアが待機していたからだ。

自動車関連工場の多い東海地域で、日系ブラジル人をはじめとして、中国や東南アジアからの技能実習生など、多くの外国籍の人びとが暮らしていることは、もちろん知っていた。しかし、実際に名古屋に来てはじめて、外国籍の人びとと共生する日常を実感した。資源ゴミ収集所では数カ国語の説明書きがあり、団地ではポルトガル語の掲示がある。東京では一部の地域でしかみられないような光景が、愛知県では各地で日々の暮らしのなかに溶け込んでいた。

今回の学生の報告のなかに、2 人の日系ブラジル人が登場する。ひとり、学生が中学 1 年のとき、つまり 2009 年にブラジルに帰国した。2009 年といえば、2008 年 9 月のリーマンショックのあおりを受け、多くの日系ブラジル人が解雇され、日本政府が日系人に対し「帰国支援事業」を実施した年である。この日系ブラジル人の親も、もしかしたら、そうして帰国せざるを得なくなった日系ブラジル人のひとりかもしれない。もうひとり、学生が中学 3 年のとき、つまり 2011 年に福島から転校してきた。当然のごとく、福島原発事故が思い浮かぶ。避難区域で暮らしていたのだろうか。補償などはどうなっているのだろうか。

学生たちは、無意識かもしれないが、政治・経済・社会的に重要な体験をしている。学生たちが、国際協力学科での学びを通じて、自身が世界で起きている事象と切り離せない存在であることを理解できるようになることを期待するとともに、わたし自身もそのような機会を与えられるよう尽力したい。

2015 年 3 月、佐伯奈津子

「多文化共生に向けて～愛知県各自治体の取り組み～」

2016 年 3 月

監修・発行 名古屋学院大学国際文化学部 佐伯奈津子

〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町 1-25

saeki@ngu.ac.jp

